

7. 当院における高気圧酸素治療装置の利用状況

高尾勝浩* 川島真人* 田村裕昭*
内田和宏* 津末輝彦**

〔* 川島整形外科病院
**サンタマリア脳神経外科〕

【はじめに】

1981年6月に第1種装置を導入し、現在は1984年12月に導入した最大治療人員8名の第2種装置を用いて治療にあっている。ここに1981年6月から1985年6月までの4年間の当院における高気圧酸素治療装置の利用状況について報告する。

【方法・対象】

2.0 ATA~2.8 ATA 下で純酸素吸入を30~60分間、20~30回を1クールとし、最短2回から最長416回であった。全症例は211例で延べ治療回数は7939回であり、1症例当りの平均治療回数は37.6回であった。性別では男性151例、女性60例と男性が圧倒的に多く、年齢は7歳から86歳にわたり、平均53.3歳で50歳代と60歳代が最も多く両者で全体の44.1%を占めていた。年度別症例数と治療件数では両者とも年々増加の傾向にあり、特に本年度からは第2種装置の利点を生かし、ガス中毒や脳梗塞が新たに治療の対象となり、救急的適応も増加してきた。疾患別症例数では、骨髄炎が62例(29.4%)と最も多く、閉塞性動脈硬化症35例(16.6%)、急性脳梗塞26例(12.3%)、突発性難聴16例(7.6%)、脊髄神経疾患13例(6.1%)、バージャー氏病11例(5.2%)、静脈血栓症、圧挫傷各8例(3.8%)、潜水病、難治性潰瘍各6例(2.8%)、ガス中毒、皮膚移植、脳血管障害各4例(1.9%)、急性動脈血栓症2例(1.0%)、ガス壊疽、レイノー病、放射線潰瘍各1例(0.5%)、その他3例(1.4%)であった。

8. 当施設に於ける過去15年間の高気圧酸素治療の概要について

滝沢隆雄 氏原康之 小島範子
谷口善郎 上田光孝 塩田吉宣
千葉和雄 青木伸弘 吉安正行
徳永 昭 笹島耕二 田中宣威
森山雄吉 埴原忠良 木曾祥久
山下精彦 恩田昌彦

(日本医科大学第1外科)

我々の教室に高気圧酸素治療装置が設置された昭和45年1月より昭和59年12月までの過去15年間に、高気圧酸素療法を施行した症例について年次別の疾患の推移、および主要疾患の治療成績について報告する。

高気圧酸素治療装置は羽生田鉄工製パナコンS1000型、内径1700φ×4645L、治療は空気加圧で絶対3気圧(3ATA)、酸素吸入を行い、治療時間は60~120分間施行した。

治療を施行した症例数は合計374例で延治療回数は15110回で、1症例あたり平均治療回数40.4回であった。

これら症例を性別でみると、男性250例、女性124例で男女比2:1であった。

年齢では生後5日目より85歳と多岐にわたり、平均48.5歳であった。

症例を救急疾患、非救急疾患に分けてみると、救急疾患ではガス中毒39例、意識障害30例、ガス壊疽29例、イレウス23例、出血ショック23例、汎発性腹膜炎18例、化膿性胆管炎15例、網膜動脈閉塞症14例、突発性難聴8例、潜水病7例、外傷6例、空気塞栓2例、凍傷2例、熱傷1例であった。次に非救急疾患についてみると、特発性脱疽45例、バージャー氏病29例、食道癌19例、皮膚難治性潰瘍18例、皮膚移植10例、レイノー病9例、閉塞性動脈硬化症5例、骨髄炎2例、スモン2例、潰瘍性大腸炎1例、喘息1例、その他16例であった。これらの疾患を平均治療回数で比較してみると、救急疾患では、平均3.05回であるのに対し、非救急疾患では、平均82.7回であった。最近10年間で見ると救急疾患では、ガス壊疽および意識障害が、非救急疾患では、食道癌等が開設当初に比較して症例の増加がみられ、いずれも高気圧酸素療法によってほぼ満足すべき成績が得られた。